老人の主張

成瀬恒吉（本中山・85歳）

明治三十七年生れ、八十五才の老人の主張であります。

大正十一年の年に、故郷を後にして都会に出た。当時の日本は、欧州文明の波に追われ、大きく揺れ動き正に激動の時代であった。ランプの時代から電気に変ったばかりの農村から出て来た若者には、素早く変り行く都会の生活が、目のまわる思いであった。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分グラグラと来た地震が前古未曽有の関東大震災であった。三〇〇年の文化の華と誇った、我が大東京が一夜にして、無惨にも焦土と化してしまった。日本国民にとって永世忘れる事の出来ない大惨禍であった。

大正は十五年で終り、昭和の御代となる。昭和も五年、六年頃は不況の呑底で世相は誠に暗かった。十年頃になると戦時色が出て多少の景気も出て来た。

昭和十六年には、日本は既に大平洋戦争に突入していた。厳しい燈火管制も、防空訓練も隣組の日課となっていた。毎日のように来る召集令状の為、町には若者の姿が見られなくなって来た。

昭和十八年以後になると、B29が偵察の為毎日飛んで来て、其の度にサイレンが鳴り国民は仕事も何も手につかなかった。

昭和二十年三月九日の夜、B29が一晩中東京を爆撃した。其の為、東京は関東大震災以上に大きな被害をこうむった。

昭和二十年八月十五日正午。天皇陛下の玉音により、長かった戦争が終った。敗戦のあとには物も金も何もなかった。しかし若さと健康があったからこそ今日があるのである。

五人の家族を抱え明日知れぬ日が続く中、必死になって生きて来た。やがて朝鮮動乱が勃発して、南北が激しく戦った。アメリカは、日本本土を基地にして南朝鮮に兵を出して加勢した。

焼野原で、鍋や釜だけを造っていた日本の工場にジープの組立や修理の特需が大量に入り、どこの工場も急にせわしくなり、日本の企業が大きく変って来た。突然起った朝鮮動乱の為、日本経済は大きく成長したのであった。

昭和三十年頃には、日本の企業が、次々に新製品を開発し、世界の隅々まで輸出した。

昭和四十四～五年には、高度成長を遂になしとげ、世界経済大国の仲間入りが出来た。現在日本の福祉政策には、心から感謝しています。

明治から大正、昭和初期、いわゆる戦前の日本は、働く事を人の本分とされた、秋の夜長にはヨナベまでして働いた。日の出と共に野山に出て、よく働いた。汗を流してこそ休息の喜びも大きい。当時ドイツ国民も、ワー

クドワークと云ってよく働いた。敗戦後、此の二国が、いち早く立ちあがり経済大国となった。いつの時代でも、いずこの国でも、働く者の勝利である。

戦後の日本が高度成長をなしとげ、物もお金も急に豊かになり、物の価値観がまったく変ってしまった。巷(ちまた)に自家用車が溢れるようになって来た。昭和四十八年のオイルショックにより、自家用車が自転車に変って多く利用されるようになった。急激にふえて来た自転車が、公共施設の場といわず道路上といわず、至る所に乗り捨ててある。其の為、公共施設の機能は麻痺状態となり、交通も混乱してしまう。

昨今の日本人は、高度成長の余韻(よいん)にあまえ、大切な社会の道義を忘れている。一番にだいじな権利義務を勝手に解釈し、正しい道徳を知りながら知らぬふりして、己れの自転車を公共施設や道路上に一日も二日も平気で放置して置くなんて、心の問題であり道徳の敗退である。

驕れる心は　常に貧しけれ
　驕る者は　いつしか必ず亡びる

資源に乏しい日本は、今からでもおそくない。豊かな物、豊かな金の酔いから速かにさめ、社会の不備を改め、己の心を正し世界に恥じない正しい社会作りに貢献しなければならない。

平成元年九月一日